

まことごころ

—詩の世界に就いて—

東京女高師教授 曾 根 保

お恥しいことに、私はまだ詩に就いて多くの人の前でお話するほぎ組織立つた理論を持つてゐない。まして詩に就いて議論をするまことごころ、即ち卑見を提出して人を説服するまことごころは到底望めない。たゞ何ごなく詩が好きで、自分でも作つて悦に入り、又他人の優れた作品に接して嬉しがる程度に過ぎない。私は、わが國の詩歌に心惹かれるのは云ふまでもないが、イギリスの詩にも非常に良いものがあるので日頃愛誦してゐる。わが國では英語を教へても散文に限り、詩は難解であり、又入學試験にも無いまことごころ理由で殆んご無用視されてゐるが、詩を知らなくて眞の散文を味はふまことごころは不可能である。又英語の本質がアクセントに在るまことごころを知つてゐながら、リズムは詩からはいはるが近道だまことごころ事實を忘れてゐる觀がある。實際、良い詩を教へて貰つたならば忘れられるものではない。詩は言葉の藝術なのだから、之に親しめば言葉に對するあらゆる認識を深めて鑑賞が出来るやうになるばかりでなく、自ら創作するまことごころも興味を覺えるやうになる。繪畫や彫刻、又音樂のやうに媒介物や器具に對する習練まことごころを要しないので、詩こそ藝術の中で萬人の物まことごころ言つて過言でない。しかし、私は今、詩を作るまことごころを奨励しようまことごころではない。良い詩、美しい詩、偉大な詩に接するまことごころは、即ち自己を高め、美化するまことごころに外ならぬから、若し私に機會が與へられるならば、今後折にふれ、イギリスの良い詩、美しい詩をまことごころに紹介して、お互に嬉しがつてみたいまことごころ願ふだけである。それで先づ初

めに序論として、廣い意味でいふ詩の世界、人生と詩との關係、詩の效用をいつたやうな、極く大まかなお話をしてみよう。

* * * * *

現代イギリス詩壇に、本年六十六歳の老齡ではあるが、今日尙盛に活躍してゐる詩人にウィリアム・ヘンリ・デイヴィスといふ人がある。小學生の頃、少年ギャング團を組織して町を荒らし、放校處分を受けた程の末怖ろしい人物で、後アメリカに渡り、放浪者の群に投じて所謂ナラズ者の生活をしてゐたが、貨車のタゞ乗りに足を這らし、文字通り失脚し、已むなく初志を繚して本國に歸つて來た。そして詩を書いて生活の資を得ようとした。三十歳の頃である。千九百三年に「魂の破壊者」といふ詩集を出して知名の士に送り、若し不用なら送り返して呉れ、入用なら代金を、といふ甚だ蟲のいゝ販賣法を試みた。ところが例のバーナド・ショーの御氣に召して、もう何部か送れといふことになり、遂に詩壇にデビューしたのである。その後幾多の詩集を公にし、今日では押しも押されぬ詩人として多くの讀者を有してゐる。この人は今云つたやうに學校教育を殆んど受けてゐないばかりでなく、ひどい境遇に身を置いたのだが、それにも拘らず、彼の詩には野卑なところなど少しも無く、又イギリス詩人にあり勝ちなベダンティックなところも無い。洵に素朴單純な氣持のいゝ抒情詩を書く人である。こゝに彼の「閑暇」と題する詩を掲げる。

この生は一體何だらう、若し心遣ひばかり多くて

佇んで、じつと物を視る暇も無いとしたら、

羊や牛のやうに、いつまでも木蔭に佇んで

じつと物を視る暇も無いとしたら、

森を通つても、栗鼠が木の實を

草の中に隠すのを見る暇も無いとしたら

眞晝間、夜空の星のやうに
きら／＼閃く流れを見る暇も無いとしたら

「美」が閃くとき、振り向いて、

その足の踊るのを見る暇も無いとしたら

その眼もミの微笑ほ・えみが口許に

ほころびるのを待つ暇も無いとしたら

ほん／＼に惨めな生まだ、若し心遣ひばかり多くて

佇んで、じつミ物を視る暇も無いとしたら

尤もこの翻譯では原詩の持つリズムも何もかも消えてしまつて、たゞ意味だけが傳へられてゐる程度であるから、この詩の美しさを十分に味はつていたゞくわけにゆかぬのは残念であるが、私の今から申上げてみたいと思ふことを卒直に、しかも詩的に言ひ表してゐるので引用したのである。デイヴィスは、この世の美しさを、しかも吾々の周圍に充滿してゐる美をエンジヨイする心の餘裕をこよなきものとして歌つてゐる。實際、吾々はこの世の中が如何に住みにくいものであるかを十分に知つてゐる。知つてゐるだけではない、苦しんでゐる、泣いてゐるのである。『明日のこゝを思ひ煩ふ勿れ、一日の苦勞は一日にて足れり』を教へられても、之を素直に受け容れるこゝはむづかしい。吾々は苦勞の坩堝にゐるのだ。何の苦しみも、執著もない幼い頃は懐しいに違ひないが、懐しいこゝいふのも吾々が苦しみを知つて始めて言へるこゝである。イギリスの偉大な自然詩人ワーズワスはかう言つて居る――

吾々は故里ふるさと、神から

榮光の雲を曳いて來る。

天は、嬰兒の時には身邊を圍んでゐるが、

獄屋ひじやの影は

生なまひ立ち行く少年せうねんに迫り始める。

けれども少年は尙光明を認め、その本質を知り、歡喜してそれを見る。

青年は日一日いちにち東から遠ざからねばならぬが、尙自然に仕へる祭司で、

壯嚴な幻がその行く手につき纏うてゐる、

終に大人おとなになつては、その幻の光は消え失せ、

唯平凡な生活の光ひかりなるのを知る。

吾々成人の生活は洵に絶望ぜつぼうといつてよい。人生は平凡へんぺいなばかりでなく、實際果敢じつげんないこゝ夥おほしい。シニイクスピアに言はせるこゝ――

明日あしたそして明日あした、又明日あした、

時は忍しのび足あしで、小刻こくみに、

記録きこくされた最後の一分まで經つて行く。

昨日きのうといふ日はすべて、阿呆あほう共が死んで土つちになりゆく道を

照てしたのだ、消けえろ、消けえろ、束たばの間の燭火しやくか！

人生は歩いてゐる影かげに過ぎない。

唯自分の時間じかんだけ、舞臺ぶたいの上で威張いぢやうつて歩いたり、惱なやんだりして、

その後は、もう音沙汰のなくなる慘めな役者だ。

騒ぎや、當りは激しいが、

たあいもない、馬鹿者が話す話だ。

かうなるま生きて行くのも馬鹿らしい。だが、人生はたゞそれきりだらうか。ワーズワースが「人間苦から生ずる慰めの想ひの中に、又死を通して見る信念の中に、吾々は力を認める」言つてゐるが、その悟りの境地に達する希望を吾々は捨てたくない。人間苦を嘆いてばかりゐるのは愚いことであらう。和樂の世界が必ずある。富士谷御杖大人は「眞言辨」に次のやうな意味のことを言つてゐる――

『人間は生れながらにして執著が深く、欲が深い。正しいことにも執著し、邪なことにも執著す。全く執著する價値の無いことを知りつゝも猶執著して、欲をかまく。人間のもつてゐるかういふ情意をひきへごころいふ。極めて稀には實にあつさりして、何ごみにも少しの執著ももたないま云ふ人があるが、それも又やはり一種の執著である。ひきへごころは時には猛然まいきり立つてひたぶるごころとなる。手におへないで困つてゐるのを見て道學の人々は道義心に隨へばいゝのだ。道義心まいふものがひきへごころやひたぶる心の外にある。それに隨へま言つてそれを高調する。なる程人間にはさういふ道々しい情意がある。おほやけごころまでもいへばいゝであらう。おほやけまいふことは理がつんでゐるが、理がつんでゐるまいふことゝ、時のよろしきにかなふことは必ず一致するま斷言することはいふは出来ぬ。ひたぶる心をおほやけごころで抑制しようましてもうまくはできぬ。しからば吾々は如何すればいゝのか。その答はかうだ。詩歌の世界に入ればよい。神韻漂渺たる心境に入るのである。これをまごころまいふ。ひきへごころを捨て去らず、ひたぶるごころを咎めだてせず、おほやけごころをけむたがらず、總てを殺さないで、總てをうまく止揚するごころで

ある。神も最上無二のころを以てこれを尊びたまふのである。』

何處を向いて見ても人間が皆惻口になつて、執著のないやうな顔をして、そのくせひこころを燃やしてゐる。このやうな厭な世の中が會つたであらうかまへ嘆かれる。尤も辭世に『此の世をばざりやおいこまにせん香の煙こもに灰さやうなら』なきこ茶化したり、『浮世の月見過しにけり末二年』なきこ如何にも執著のないやうな言葉を残した一九や西鶴も、否、その時代の人々も案外今日の人のやうだつたかも知れぬ。それにしても五十二歳を『浮世の月見過しにけり』こは『人間五十の極り』を餘りにも正直に考へたものである。學校を退いても研究は可能であるものを、六十歳の停年制をさへ短か過ぎるやうに言ひ勝ちなのが今の世の中である。

「まごころ」おほやけごころ」に就いて、もう少し考へてみよう。英語の形容詞に二種類あるこは御存じご思ふ。即ち blue sky や red rose に於ける blue や red のやうに論理的、理智的なもの、my little girl や old John の little や old のやうに「小さい」こか「年こつた」こいふだけの意味でなく、何もなく親しみの情合を漂はせてゐる情緒的なものこである。翻譯の場合には前者は言葉そのまゝを日本語に移せば用は足りるが、後者の場合はさう簡單にゆかない。形容詞なしで文章が書けないこもないだらうが、やはり二種類の形容詞を生かして使用することが望ましい。理論的、理智的方面だけで片づけては固くなつてしまふであらう。「おほやけごころ」即ち理で押し行つては露ひが無い。夏目漱石の「草枕」は次の名文で始まつてゐる――

『山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮窶だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが昂じるこ、心安い所へ引き越したくなる。ここへ越しても住みにくいこ悟つた時、詩が生れ畫が出来る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張向う三軒兩隣にちらくする唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからこゝて越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行く計りだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。

越すこゝのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をされほぎか寛容げて束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である。あゝるは音楽を彫刻である。こゝまかに云へば寫さないでもよい。唯まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も涌ぐ。着想を紙に落さずとも鑿鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自ら心眼に映る。唯おのが住む世を、かく観じて得て、靈臺方寸のカメラに澆李瀾濁の俗界を沾くうらゝかに收め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人世を觀じて得るの點に於て、かく煩惱を解脱するの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て——千金の子よりも、萬乗の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこゝ二十年にして、住むに甲斐ある世を知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹影がさすこゝ悟つた。三十の今日はかう思うて居る。——喜びの深き憂ひ愈深く、楽しみの大なる程、苦しみも大きい。之を切り離さうとするこゝ身が持てぬ、片附けようとするれば世が立たぬ。

この中に文豪の人生觀、藝術觀が窺はれる。苦しみの現實から「ありがたい世界」を觀る時、人は始めて現實に生きる價

値を見出すのである。

二十世紀に足りないものは睡眠だと言はれてゐる。子供にさへも睡眠が足りない。近頃の都會の子供はパッチリ目を開けてゐるながら、その眼の底には澄み切つた深みがない。よく見えさうな眼をしてゐても、遙か彼方を映す清澄さがない。近眼は現代人の特色である。自分の子供のこをお話しては相濟まぬが、いつぞやこんなこがあつた。尤も私の子供も睡眠不足の連中の一人であるこは申す迄もない。或る朝、私が起しに行くこ、『駄目だよ、駄目だよ』と言つて枕にしがみついてゐる。肩をゆすぶつてやるこ『駄目だつたら、今夢みてるんだから。そんなにしちやばらくに壊れてしまふぢやないの』と言ふので、私も手の下しやうがなくて引き退つた。子供は夢で遊んでゐるのである。しかし現實はなかく夢に假借しない。夢を丁度鏡でも粉碎するやうに壊してしまふ。恐しいこではあるが、現實の世に生きてゐる子供は仕方がない。起きて學校へ急がなければならぬ。又それがこの世の眞の相である。いくら子供でも夢ばかりに浸つてゐるこは許されない。それにしても現代は餘りに睡眠が、夢が足りない。「まこころ」が不足してゐる。

漱石の所謂「ありがたい世界」、即ち藝術の世界は又「無用の用」の世界を呼ぶこも出来る。無用の用はたゞ趣味の問題だなど言つてしまつてはいけぬ。それは認識不十分である。眞の詩の世界は「無用の用」の世界、即ち無用のものがあるこなる世界である。或る詩人はかう叫んでゐる——「詩は神祕な道を辿つてその獨特な絶對價に高潮して來る刹那、見よ、不思議にも無用は忽にして有用に變る。人若し無用なものが場合が違ふこ最も有用になる(例をあげるこ小流の岸に捨てられた小石だ。その小石から教訓を聽くに於ては最も重要なものこなる如く)こを知らば、詩歌に於ける無用の姿が二重にも價の有るのを知つて來るであらう。有用の一面がその無用の姿の裡から恰も暗い夜の胸から眞晝が生れる如く、常に生れ出るのである。人生の大部分は非現實の上に建てられ、非現實そのものゝ力に依つて現實が充満され、又緊張され

て来る」を。洵に真理である。ゲーテが「世を逃れるに藝術程たしかな道はない、又世を關係を結ぶに藝術程適當な道はないであらう」を言つたのは、やはりこの邊のことを説いたもので、意味深遠である。昔から「人生の爲の藝術」、「藝術の爲の藝術」といふ二つの問題が論議されて來たが、人生の爲ならざる藝術は存在し得ないし、又藝術の爲に作られない藝術も眞の藝術ではない。

現實から非現實に進む時、藝術の國に入る。岡倉天心先生の「茶の木」に、『原始人が愛する處女に花環を捧げるを始めて野獸の域を超越した。かくて自然の實用を超えて人間になつた。玄妙な無用の用を知つた時藝術の世界にはいつた』とある。又藝術の境地は究局に於て宗教や道德の境地とも一味相通するものがある。右肺を全部失ひ、左肺も既に第三肋骨のあたりまで侵されてゐる病牀の一婦人が「魂の憩場」と題して次の如く書いてゐるのを私は新聞で讀んだ。現實に生きて之を越えた世界を認める。即ち「まごころ」を持つは幸福の極みである。

『私は未完成な一個の凡人に過ぎない。時に不平もあり、時に不安もある。癩癩も起きる。だが、それでよい。喜びや、悲しみや、怒りや、それらのものがあつてこそ、人の世は美しく楽しい。大自然にも風雨あり、雷雨あり、時に水雨のあるやうに、人の心も晴明な天氣ばかりはつゞかない。時に曇り、時に時雨れ、而して時に沛然として驟雨至る。しかしそれらは、表面に浮動する一時の現象に過ぎない。雲の彼方に巖然として動かぬ太陽の照る如く、吾等の心の底には、何物にも侵されぬ神の榮光がある。佛陀の般若がある。眞如の世界がある。深夜靜かに眼を閉ざし、想ひを秘めて、内なる人に見參する時私の魂は躍動する。そこには、憂き悩み、譏り、詔ひ、諸々の俗界を超えた寂境がある。俗界を拒否するのではなくて、これを容して、これを越えた世界がある。こゝでは神と人が相擁して、共に語り共に呼吸づく。これこそ「まごころ」の世界、又漱石の言ふ「ありがたい世界である。實際「あはれあの月も我が爲の月なり、あの

山、あの水も我が爲の山に水なり』を觀するところ、「まことにこの」の働くところに詩の世界がある。「徒然草」第三十一段に――

『雪のおもしろう降りたりし朝、人のがりいふべき事有りて、文をやるまで、雪の事何ともいはざりし返事に、かへりて「此雪
いかに見るに一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人の仰せらるゝ事、聞きいるべきかは。かへすかへす口惜し
き御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。』

こある。非常に面白い話である。このやうなゆかしい心の人が今日も多くあつてほしいものである。このゆかしい心こそ無用の用を知つた心である。巧利の世界、理づめの世界にあつて「まことにこの」を持つ心である。ゆかしい心の世界は誰もが持ち得る世界である。人間が強いといふのは、單に腕力や智力が人に優れてゐるといふのではない。「おほやけごゝろ」は尊重すべきであるのは勿論だが、ゆかしい人情ほご強みのあるものはない。高きもの、美しきものに親しみ、それを不斷に意識に浸透させること、即ち「まことにこの」を養ふことが情操教育でなくてはならないと思ふ。安價なセンチメントに混同してはいけない。夢の世界はたゞへ現實が絶えず破壊の斧を振ふにしても、決して捨つべきではない。現實に押し流されて生きるだけなら、人生は憂鬱にきまつてゐる。それこそ『ほんまうに惨めな生だ、心遣ひばかり多くて、佇んで、じつと物を視る暇もないとしたら』。

イギリスの神祕詩人ウィリアム・ブレイクは一粒の砂にも、又一もこの草花にも天國を見てゐる。

一粒の砂に世界を、

野の花に天國を見、

君が掌に無限を、

一時ひとときのうちに永劫を掴め、

詩人の深い思念の世界から放たれた神祕な言葉、私はその暗示の中に限りない愉悅を感じる。又アメリカの詩人ホイットマンも

私は信ずる、一枚の草の葉も詩の仕事に劣らないことを、

また、生ひのびる鉤かぎ懇こん子こは天國の客間を飾るに足ることを。

ミ歌つてゐるが、吾々は詩の世界にはいり得るが故に、有限の現實の世界も無限に連ることを知り、この住みにくい世もありがたい和樂の世界を觀ずるこゝが出来るのである。

* * * * *

さてこゝに一匹の蠅を捕へて來る。實に厭はしい存在であるが、これを詩の世界に住む人がきのやうに觀てゐるか、きのやうに歌つてゐるか、考へてみよう。始めに散文を掲げる。これはイギリスの閨秀作家マンスフィールド女史の短篇『蠅』の中の一節で、「彼」ミいふのは歐洲大戰で獨り息子を失つた實業家である。戦死した當時は諦めが肝要だミ踏みこたへてゐるが、最近ベルギーで息子の墓地に詣で、歸つて來た友人の話を聞いて急に憂鬱に閉ざられ、今息子の寫眞の前で獨りむしやくしやしてゐるこゝろである。

『彼は一匹の蠅が、口の廣いインク壺の中に落つこちて、よぢ登らうとして、か弱いが必死の努力をしてゐるのに氣がついた。

「助けてくれ、助けてくれ」ミいふやうに脚をもがいてゐる。でもインク壺の内側は濡れてつる／＼してゐて蠅は又落ちてインクに漬かつた。彼はペンを取り上げて蠅をすくひ出し、吸取紙の上へ抛り出した。一寸の間蠅は黒くしみが出

來た中にちつこしてゐた。やがて蠅は前脚を動かし突立つて、びしょくになつた小さな身體を起し、翅についたインクを落すさいふ大仕事に取りかゝつた。砥石が大鎌を研ぐ時のやうに上下、上下ミ脚で翅を撫でた。しばらくするミ爪先で立ち上るやうな様子で、最初片方の翅を擴げ、次いでもう一方のを擴げた。さうく成し遂げた。今度は腰を下して、小さな猫の様に顔を撫で始めた。小さな前脚を軽々喜しさうに擦り合せてゐる様子がわかるではないか、危難は過ぎた。助かつた。生命が再び廻つて來た。

ところが、その時彼はある事を思ひついた。ペンをインク壺に突込み、吸取紙の上に頑丈な手首を置いて飛ばうこしてゐる蠅の翅の上にぼこりミ一滴大きな半を落した。蠅はさう思つたであらう。本當にちびさんはすつかりおぢけて、目がくらんでしまひ、この先さうなる事かミ恐れて動きもしなかつた。が少しするミ苦しさうに身體を前に動かし、前脚を動かし突立つて、今度はゆつくりではあるが大仕事を又初めからやり出した。

實に勇敢なちびだなミ思つて、彼は蠅の勇氣に全く感嘆してしまつた。物事にぶつかるとはかうでなくつちやいけな。偉いものだ。悲觀するなよ。そんなことを問題にするのは唯……。

ところが、蠅がその大仕事を再び完成した時、彼は又ペンをインクをつけて綺麗になつたばかりの蠅の身體の上に堂々さもう一滴振り落した。さうなるだらう。痛ましい氣懸りな幾秒かは過ぎた。然し何さまあ、前脚は又動き出したのだ。彼は急にぼつこした氣持になつた。彼は蠅の方に身體を寄せて優しく言つた。「ずるい奴……」さうして實際に息を吹きかけて蠅の乾燥工作を手傳つてやらうミいふ素晴らしい思付を抱くのだつた。やはり、今度の努力にはさうかおきおぎした氣弱さが見えた。そして彼は今度はお陀佛にしてやらうミ思ひながらペンをインク壺に突込んだ。

その通りだつた。前後の一滴が濡れた吸取紙の上に落ちた時、蠅はだらしなくなつて動かなくなつた。後脚は身體にく

つゝいて居り、前脚は見えなかつた。

「さあ、しつかりしろ」を彼は言つた。さうしてペンで動かして見たがもう駄目だつた。蠅はさうもしなかつたし、する風もなかつた。蠅は死んでしまつた。

彼はペイバ・ナイフの端に死骸をのせ、紙層籠に抛り込んだ。しかし可哀さうださういふ重苦しい氣持がこみあげて來て遂にはさうも恐ろしくなつて來た。彼は立ち上つてベルを押してメイシーを呼んだ。

『新しい吸取紙を持つて來てくれ』を彼はきびしく言ひつけた。ぐづくするんぢやないぞ。』

ブレイクは『蠅』をいふ題で次のやうに歌つてゐる――

ちつちやい夏の蠅よ、

お前が遊んでゐるころを

なにげなくこの手が

拂ひのけてしまつた。

自分もお前も同じ

蠅ではないのか、

それさもお前は俺と同じ

人ではないのか。

さういふのは、俺も踊り、

飲み、且つ歌ふ。

運命の手が誰彼の用捨なく

俺の羽根を拂ひのける日まで。

物を思ふさいふのが生きてをり、

力があり、呼吸をしてゐる證據で、

思はなくなれば

死ださいふのなら

それぢや、俺は

仕合せな一匹の蠅だ、

生きるにしても、

死ぬるにしても、こもかく。

原詩の持つ蠅そのものゝやうな輕快な調子は譯文には全然出てゐない。よろしく原詩について味讀していただきたい。
次に、石川啄木の歌——

ひさしぶりに

ふみ聲を出して笑ひてみぬ

蠅の兩手を揉むが可笑しさに

最後に一番短い言葉數で歌つたもの、我が一茶の句、

やれ打つな蠅が手をする足をする

十七文字の中に蠅が躍動してゐるばかりでなく作者の溫情が溢れてゐて、吾々は微笑を禁じ得ない。やはり『得たる者の作は、何ごもを言ひ出したるも、ひみふし興ありて面白き也』である。